氏　　名		徐　　凡　軒
学 位 の 種 類		博士（美術）
学 位 記 番 号		博美第 11 号
学位授与年月日		平成２８年３月２５日
学位授与の要件		学位規則第４条第１項該当者
題目	学位論文題目	風景山水―美術における「純化」表現
	研究作品題目	水光シリーズ： 《恍惚Ⅰ》、2014 年、紙本着彩、P50（116.7×80.3cm） 《恍惚Ⅱ》、2014 年、紙本着彩、P50（116.7×80.3cm） 《秋水Ⅰ》、2014 年、紙本着彩、P50（80.3×116.7cm） 《秋水Ⅱ》、2014 年、紙本着彩、P50（80.3×116.7cm） 《春水Ⅰ》、2014 年、紙本着彩、P50（116.7×80.3cm） 《実質ではない本質》、2014 年、紙本着彩、P50（116.7×80.3cm） 《春水Ⅱ》、2015 年、紙本着彩、P300（218.2×291.0cm） KOMOREBI シリーズ： 《生息Ⅰ》、2015 年、紙本着彩、P50（80.3×116.7cm） 《生息Ⅱ》、2015 年、紙本着彩、P50（80.3×116.7cm） 《意象の表徴》、2015 年、紙本着彩、P50（80.3×116.7cm） 《空白という外部を抱えたⅠ》、2015 年、紙本着彩、F120（130.3×194.0cm） 《空白という外部を抱えたⅡ》、2015 年、紙本着彩、F120（130.3×194.0cm）
論 文 審 査 委 員		主　査　教　授　秦　誠 副　査　教　授　北田　克己 副　査　教　授　岡田　眞治 外　部　東京藝術大学大学院 審査委員　准教授　荒井　経

1　学位論文の要旨

島国である台湾は、古くから様々な外来文化が交わって併存してきた。そして地理的位置や歴史的な要素などの原因により、特に中国と日本から強い影響を受けている。本研究は筆者がその両国文化を考察した上で、改めて自分の思索の経路や美術に対する表現を整理し、理論化したものである。そして台湾のアイデンティティーを唱えた純化表現による「風景山水」の概念を提唱し、論文と制作を通じて山水画を革新する試みをした。

純化とは思惟において絶えず自己を省み、まじりけを除き、精華のみをとどめ物事の本質や精神性を引き出す過程である。本研究では中国文化の中の「形」と「意」の概念をはじめ、『老子』と『易』における「象」の変化を分析した上、中国美術における「写意画」が発展してきた過程を探究した。またこの伝統的な「写意」の精神、つまり尚意（より意

を重んじ)、尚簡（より簡潔に)、尚自然（より自然に）の三つの特徴から、清澄、諧調、統一の三つの「純化指標」に分類、分析し、純化表現の判断の基準を設けた。そして過去における日本画の革新の経緯と台湾文化とを照らし合わせて、「風景山水」―視覚的に風景画の最低限度として成立し、精神的に山水画の形象と意象との二重性を継承する―という山水画の新観念を提唱し、そして「水光」と「KOMOREBI」の二つの作品シリーズでそれを実践し、造形と寓意の上で精確な表現ができるように努力をした。

２　学位論文審査の要旨

徐凡軒は博士後期課程研究において、作者が主張する純化表現によるこれまでの山水画の概念を革新する風景山水への概念を論証、実践を通して提唱している。

論文「風景山水―美術における純化表現―」第一章で山水画の革新を研究目的に掲げ、そこに至る過程を明解に示している。

第二章は中国文化の「形」と「意」の概念をはじめ中国芸術の美学的思惟に結びつく道家的思想、老子と易伝における「象」の変化を分析、研究し、その文化背景から中国美術における「写意」の概念が発展した過程を考察し、続く「第三章純化表現とその方法論」では中国絵画の表現技法「工筆画」の繊細さを保ちながら「写意画」のリズム感と抒情性を表現するという著者独自の純化の概念を提唱し、その上で純化の概念を実践するために「単純」「諧調」「統一」の三つの指標を設定し、その指標による表現効果を分析、考察している。

第三章、第三節で西洋の風景がと東洋の山水画の概念を歴史的に考察していて、特に近代において西洋美術に影響を受けた中国絵画と日本絵画の変革を分析することにより、著者の「風景山水」という制作概念を主張する。

第四章は風景山水の純化表現による作品制作の実践と検証を行い、第五章で結論し、現在の成果と今後の方向性を示している。

以上のように、論文「風景山水―美術における純化表現―」は著者自身が影響を受けた中国絵画の根幹である中国哲学、美学の考察、さらに留学後の日本の美意識にも触れることで、自身の母国台湾のアイデンティティーを再認識し、それまでの山水画の概念を革新する作者の純化指標に基づく純化表現による風景山水への概念を論証、実践を通して提唱するという主張であり、テーマ、目的、歴史的考察、方法論、実践検証、結論の論述が明解で、説得力がある。また、中国、台湾、近代日本の絵画の流れを俯瞰した上で、作家としての自分の持論を展開し、目的、そしてその手法を明解に示した論理性は一定の水準に達している。

研究作品は「風景山水」をテーマに「水光シリーズ」「KOMOREBI シリーズ」の二つのシリーズに展開している。

まず「水光シリーズ」では審査対象作品の「恍惚Ⅰ」2014 年制作から「春水Ⅱ」2015 年制作の作品に至る 7 点の作品は水と光を対象に純化表現を試みている。

「恍惚Ⅰ」、「恍惚Ⅱ」は淡い色彩で渦巻くような泡立つ波を描き、静謐な中に秘めた水のエネルギーを描写している。一方「秋水Ⅰ」、「秋水Ⅱ」は墨を主体に水が持つエネルギーそのものを捉え、迫力のある作品となっている。また、「実質ではない本質」では水面に

雨だれの波紋を描き、その微妙な表情を描こうとしている。

中国山水画の構成要素を絞り、水と光をテーマに、それぞれの変化を繊細に捉えていて秀逸であるが、まだ説明的で余白の捉え方にも純化表現が活かしきれていない。これからの展開に期待したい。

一方、「KOMOREBI シリーズ」は 2013 年頃からの作品「図 51～図 69」で作者の純化指標による純化表現を着実なものとしていく作者の試行過程が興味深い。

審査対象の研究作品 KOMOREBI シリーズ「生息Ⅰ」～「空白という外部を抱えたⅡ」5 点（2015 年）では純化表現による墨色の諧調と余白が見事に調和し、清澄で美しい。日本語の「木洩れ日」という言葉に感動した作者の心情が、作者の主張する純化表現によって見事に画面に投影され、論文「風景山水―美術における純化表現―」における論旨が高い次元で実践されたすぐれた作品であり、高く評価できる。

以上、徐凡軒論文「風景山水―美術における純化表現―」は外部審査員を含む 4 名の審査員全員が基準を満たし合格と判断した。

３　最終試験結果の要旨

徐凡軒の口頭発表及び口頭試問においては、論文内容を的確に説明し、審査委員の意見、質問に関しても率直に答えたという内容であり、審査委員会において最終試験について合格と判断した。

以上、徐凡軒の論文、研究作品は博士学位審査及び最終試験において外部審査員を含む 4 名の審査員全員が優秀と判断し、かつ基準を満たし、合格であると結論した。